

<研究ノート>

## 大学生における優劣感情と生きがい感の関係

柴 原 直 樹

### A Study of Relationships between Feelings of Superiority-Inferiority and Worth-Living in College Students

Naoki SHIBAHARA

This research was designed to examine a feeling of worth-living and its relation to a feeling of superiority and inferiority in college students. In total, 124 students participated in this research. The results showed that a feeling of worth-living became lower (or higher) in accordance with the elevation of a feeling of inferiority (or superiority), and that a feeling of inferiority in ability and that of social superiority contributed to making a feeling of worth-living lower and higher, respectively.

大学生における生きがい感と優劣感情との関係を明らかにするために、1年生から4年生までの学生124名を対象に調査を行った。その結果、生きがい感は劣等感が強まれば低下し、優越感が強まると高くなることが分かった。特に、才能における劣等感情が生きがい感の低下に影響し、社会的な面での優越感情はこれを上昇させる重要な要因であることが示された。

**Key words** : Superiority, Inferiority, Feeling of Worth-Living, Adolescence, Self

優越感、劣等感、生きがい感、青年期、自我

#### はじめに

かつて、スタンリー・ホール (Stanley Hall, 1846-1924) は青年期を「疾風怒濤」(Strum und Drang) の時代と表現した。他者に無関心で傍若無人に振舞っていた青年が、人前で自意識過剰になり緊張感から心身ともに硬直してしまう。また、内省的に自己を深く洞察するかと思えば、無鉄砲な自己顕示的行動に出たり、自己を過大評価して息高揚したかと思えば、自らを卑下して自己嫌悪に陥り、「世界中の誰とも異なる唯一無二の存在」(個別的孤独) から「何十億分の一の

取るに足らないチツポケな存在」(孤立的孤独) になったりする。このように、青年は過敏で傷つきやすく、彼らの思考や感情、態度は相反する両極へ容易に移行し、しかも対立する両極の傾向が併存するといった、易変性 (instability) および動揺性 (fluctuation) の特徴を有しているのである (梶田, 1988<sup>1)</sup>; 福井, 2007<sup>2)</sup>)。

この青年期には、急激な身体的変化とともに自己の意識も変化する。しかし、身体の成長と精神の発達が相伴わないため本来の自己に馴染めず、「自分であって自分でない」ような違和感を覚える。「万物は流転する」と

1) 近畿医療福祉大学 (Kinki Health Welfare University) 〒679-2217 兵庫県神崎郡福崎町高岡1966-5

ヘラクレイトスは言ったが、今ここに存在する自分はかつての自分とは別物なのだ、いや数日前の自分とさえ同じではないと実感する一方、現在と過去との連続性・恒常性・同一性の上に自我が構築されていることを否定することはできないのである。かくて青年の自我はこの異質性と同一性の狭間で揺れ動き、一種の自己矛盾に陥る。成人になるということは自己受容的になることであり、自我の違和的な状態から親和的な状態へと移行し、この自己矛盾を解決していくことなのである（西平, 1990<sup>3)</sup>；西平・吉川, 2000<sup>4)</sup>）。

ところで、青年の自我は劣等感や自尊心、虚栄心や羞恥心といった自我感情として意識されることが多いが、中でも劣等感はその中核を占めるといっても過言ではない。劣等感とは、自分と他者を比較したり自分自身の中に劣等性を認めたりすることから生ずる感情というよりは、むしろ現実にかくであると自ら認めている「現実自己」と、かくありたいと希求する「理想自己」との関係で生じる感情なのである（落合・伊藤・齊藤, 2002<sup>5)</sup>）。したがって、自ら設定した高い要求水準に到達できないと認めるや劣等性を覚え、自己の存在価値を見出し、現状に満足を感じるとこれを否定する。

この劣等性は現実自己と理想自己の差異の拡大により強まるが、現実－理想自己の差異は生きがい感と関連する。近藤・鎌田(1988)<sup>6)</sup>は、生きがい感を「自らの存在価値を意識し、現状に満足し、生きる意欲を持つ過程で感じられるもの」として定義づけているが、この生きがい感は現実－理想自己の差異が小さいと高く、大きいと低くなることが知られている（福長・田頭, 2004<sup>7)</sup>）。このことから、一般に劣等感は生きがい感を低め、優越感はこのを高めるものと仮定される。しかし、青年期において自我感情は両価性によって支配

され、一方では自分を取るに足らない存在と卑下し、他方では自分の卓越性に対し自尊の念を抱くといった、劣等感－優越感が同時に同一人に存在するなら（稲村, 1988<sup>8)</sup>）、青年の生きがい感は高くもあり低くもあるといった矛盾したものになる。

そこで、大学生（1年生～4年生）を対象に、青年期における劣等感－優越感と生きがい感を測定し、両者の関係を明らかにすることを本研究の目的とした。

## 方 法

### 対象者

K大学の大学1年生22名（男性9名、女性13名）、2年生33名（男性11名、女性21名）、3年生38名（男性16名、女性22名）、4年生31名（男性12名、女性19名）、計124名を対象とした。

### 調査用紙

生きがい感の測定に関しては、近藤(2007)<sup>9)</sup>が作成した「青年期の生きがい感スケール」を利用した。31の質問項目に対し、「はい」「どちらでもない」「いいえ」の3件法による回答を求めた。また、それぞれの回答に対して、3点、2点、1点を割り当て得点化した。したがって、得点が高くなるほど生きがい感も高くなる。

劣等感－優越感の強弱については、西平(1964)<sup>10)</sup>による「自我態度インベントリ」を使用した。50の質問項目から成り、半分は劣等感、残り半分は優越感の判定に用いられた。回答は「いつでも非常に強く感じている」「時々感ずる」「どちらともいえない」「あまり感じない」「全く感じたことがない」の5件法で求め、それぞれの回答に対し5点から1点を割り当て得点化した。また、劣等感お

よび優越感に対する質問項目には、それぞれ「才能的」「身体的」「社会的」「性格的」な特性、および「兆候」に関するものが5項目ずつ含まれている。これにより、どのような側面に劣等感あるいは優越感を持っているか調べることができる。

#### 調査時期と調査方法

2010年4月から7月の間に学年毎に分けて実施した。各学年の学生に調査用紙を配布した後に、回答方法を説明し、各項目について回答を求めた。調査用紙ならびに回答用紙は、調査終了後にその場で回収した。

## 結 果

#### 生きがい感の分析

各学年における男子および女子学生の生きがい感得点の平均値を表1に示す。全学年の生きがい感得点の平均値は65.7（男性=66.7、女性=65.1）、SDは10.92（男性=8.87、女性=12.05）であった。また、1年生から4年生までの生きがい感得点の平均値は、それぞれ71.3、63.7、66.4、62.9と1年生が高く4年生が低かった。

4（学年）×2（性別）の分散分析の結果、学年間で生きがい感得点の平均値に有意な差がみられた（ $F(3,116)=3.030, p<.05$ ）が、性別（ $F(1,116)<1$ ）および交互作用（ $F$

$(3,116)<1$ ）では有意差はみられなかった。下位検定によると、1年生と2年生（ $t_{53}=2.699, p<.01$ ）、1年生と4年生（ $t_{51}=3.021, p<.01$ ）の間に有意差があった。また、1年生と3年生では有意傾向が見られた（ $t_{58}=1.873, p=.066$ ）。この結果は、2年生、3年生、4年生の間では生きがい感に差はなく、1年生のみが他の学年に比べて生きがい感が高いことを示している（ただし、表2に示した近藤（2007）<sup>9)</sup>の生きがい感の判定基準によると、全ての学年において「ふつう」（64～74）の範囲にある）。

さらに、近藤の判定基準による各学年における生きがい感得点の分布を比率（％）に換算して図1に示す。

1年生と3年生の生きがい感は「普通」である割合が一番高く、「高い方」、「大変高い」

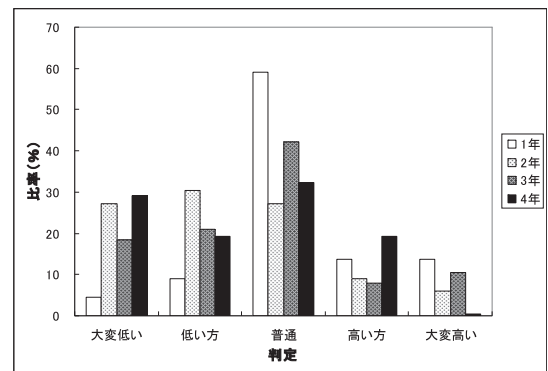


図1 近藤の判定基準による各学年における生きがい感得点の分布（比率に換算）

表1 各学年における男子および女子学生の生きがい感得点の平均値

	1年生		2年生		3年生		4年生	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
生きがい感	71.6	71.1	65.0	63.0	66.7	66.1	64.5	61.9

表2 近藤（2007）<sup>9)</sup>による生きがい感の判定基準

点数	93～81	80～75	74～64	63～58	57～31
評価	大変高い	高いほう	ふつう	低いほう	大変低い

(あるいは「低い方」、「大変低い」)になるにしたがって減少する傾向がみられる。2年生では「低い方」を頂点に両サイドに緩やかに減少している。また、4年生は「普通」および「大変低い」が高い割合を示す逆N字型の分布を描いている。

### 自我態度インベントリーの分析

表3に各学年における男子・女子学生の劣等感得点および優越感得点の平均値を示す。全学年の劣等感得点の平均値は79.8（男性＝78.1、女性＝80.9）、SDは12.57（男性＝11.83、女性＝12.98）であった。同様に、優越感得点の平均値は68.8（男性＝71.1、女性＝67.3）、SDは11.61（男性＝11.96、女性＝11.20）であった。

各被検者の得点は25～125点の範囲で分布し、すべての項目に対し「どちらともいえない」を選択した場合の得点が75点となる。この75点を境界とし、これより得点が高くなる（あるいは低くなる）にしたがって劣等感および優越感が次第に強まる（あるいは弱まる）と判断すると、本被検者の劣等感はやや強い傾向にあり、優越感はやや弱い傾向にあると

いえる。

4（学年）×2（性別）×2（優劣）の分散分析を行った結果、学年( $F(3,116)=3.861, p<.05$ )および優劣( $F(1,116)=39.451, p<.001$ )で有意な主効果が見られた。また、交互作用は学年と優劣の間でのみ有意であった( $F(3,116)=3.877, p<.05$ )。この交互作用は、図2から明らかなように、2年生、3年生、4年生では劣等感の平均得点の方が優越感よりも高いが、1年生では両者の平均得点はほぼ同じであることを示している。さらに、劣等感得点と優越感得点の間に有意な負の相関( $r=-.416, p<.001$ )が見られたことから、劣等

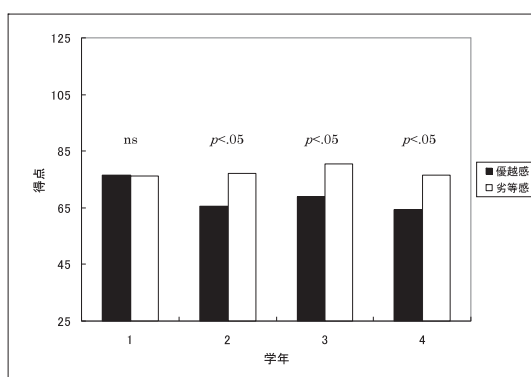


図2 各学年における優越感および劣等感得点の比較

表3 各学年における男子・女子学生の劣等感得点および優越感得点の平均値

	1年生		2年生		3年生		4年生	
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性
優越感	77.7	75.8	70.1	63.1	68.9	68.9	70.3	64.3
劣等感	75.1	76.8	78.4	76.4	78.3	82.1	80.0	87.6

表4 劣等感および優越感における5つの側面についての平均値得点

	優 越 感					劣 等 感				
	才能	性格	社会	身体	兆候	才能	性格	社会	身体	兆候
1年	12.0	17.0	15.6	16.0	16.0	14.2	16.4	15.4	13.0	17.0
2年	10.3	15.2	12.2	12.5	15.2	15.9	15.4	16.3	13.7	15.7
3年	9.9	16.0	14.0	13.2	15.7	16.5	16.8	16.3	14.7	16.2
4年	10.3	14.9	13.0	12.8	15.6	18.2	17.9	17.1	14.9	16.6

表5. 優越感と生きがい感の相関

	1	2	3	4	5	6
1. 生きがい	1.00	.318**	.444**	.580**	.310**	.062
2. 才能的		1.00	.497**	.452**	.427**	.307**
3. 性格的			1.00	.537**	.407**	.185*
4. 社会的				1.00	.374**	.133
5. 身体的					1.00	.097
6. 兆候						1.00

(\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$ )

表6. 劣等感と生きがい感の相関

	1	2	3	4	5	6
1. 生きがい	1.00	-.590**	-.340**	-.372**	-.299**	-.056
2. 才能的		1.00	.602**	.401**	.436**	.236**
3. 性格的			1.00	.523**	.422**	.240**
4. 社会的				1.00	.294**	.203*
5. 身体的					1.00	.300**
6. 兆候						1.00

(\*  $p < .05$     \*\*  $p < .01$ )

感が強いほど（あるいは弱いほど）優越感は弱くなる（あるいは強くなる）傾向にあることが分かる。

また、前述した劣等感および優越感における5つの側面について、各学年の平均値を表4に示す。それぞれの得点は5～25点の範囲内にあり、すべての項目に「どちらでもない」と回答した場合は15点となる。特に、才能および社会面において、1年生を除く各学年で劣等感が強く優越感が弱い傾向が見られる。

#### 生きがい感と劣等感・優越感との関係についての分析

生きがい感と劣等感の間に高い負の相関 ( $r = -.493, p < .001$ ) が、生きがい感と優越感との間に高い正の相関 ( $r = .507, p < .001$ ) が見られた。このことは、劣等感が強く優越感が弱いほど生きがい感が低く、逆に優越感が

強く劣等感が弱いほど生きがい感が高くなる傾向にあることを示している。

また、劣等感および優越感における5つの側面（才能・社会・性格・身体・兆候）の中で、どれが生きがい感と高い相関があるか検討するために分析を行った。その結果、劣等感においては才能、社会、性格、身体面の順で生きがい感との間に有意な負の相関があり（表5参照）、優越感においては社会、性格、才能、身体面の順で生きがい感との間に有意な正の相関があった（表6参照）。

さらに、劣等感および優越感における5つの側面のうちどれが生きがい感を規定しているか調べるために、これら5つの側面をそれぞれ説明変数とし、「生きがい感」を目的変数として重回帰分析を行った。その結果、劣等感においては「才能」が、優越感においては「社会」の変数が「生きがい感」を規定し



ていることが明らかになった ( $R^2=.473$ )。すなわち、才能面での劣等感が生きがい感を低め ( $\beta = -.541, p<.001$ )、社会面での優越感が生きがい感を高めている ( $\beta = .459, p<.001$ ) ことが分かった。

## 考 察

生きがい感および自我態度（優越感－劣等感）の分析において、2年生、3年生、4年生間で類似したパターンがみられたが、1年生では異なったパターンが検出された。すなわち、2～4年生の生きがい感得点は同程度で、彼らの劣等感は比較的強いが優越感は弱い傾向にある。しかし、1年生は他の学年と比べて生きがい感得点が高く、劣等感と優越感が同定度に高い傾向にある。

稲村 (1988)<sup>8)</sup>によると、思春期は医学分野で使われ始め、第二次性徴開始時から性的に大人として完成するまでの時期を指すが、青年期は心理学用語で、自我に目覚めた時期からアイデンティティが確立するまでの時期のことをいう。そして、思春期において依存性や自立性、劣等感や自尊心といった相反するものが一人の人間に共存するとしている。青年期を前期（中学）、中期（高校）、後期（それ以降）に分けると、思春期はほぼ青年期の前期と中期に当たるといわれるが、本研究対象の大学1年生の調査が5月という大学入学後間もない時期に行われたことを考慮すると、彼らは青年期の中期と後期の境目に位置し、思春期において最終段階にあると見なすことが可能である。これに対し、大学2年生以降は思春期も終わり青年期後期に分類することができよう。こう考えると、何故1年生だけが劣等感と優越感が同程度に高いか理解できる。また、優劣感情が同時に存在するなら、生きがい感はどうなるかという問いに対

しては「高くなる」という答えを得た。

大学生全体という観点からすると、劣等感の強い学生は生きがい感が低く、優越感の強い学生は生きがい感が高い傾向にあるといえる。特に、才能における劣等性の自覚が生きがい感を低下させ、社会面での優越性が生きがい感を高めていることが分かった。本研究の被検査者が福祉系の大学生であるため、ボランティアや福祉現場での実習といった福祉活動を通して自己の存在価値が高められ、これが生きがい感に影響していると考えることができよう。

## 引用文献

1. 梶田叡一：自己意識の心理学 東京大学出版会 1988
2. 福井康之：青年期の対人恐怖 金剛出版 2007
3. 西平直喜：成人になること－生育史心理学から 東京大学出版会 1990
4. 西平直喜・吉川成司：自分さがしの青年心理学 北大路書房 2000
5. 落合良行・伊藤裕子・齊藤誠一：青年の心理学（改訂版） 有斐閣 2002
6. 近藤勉・鎌田次郎：現代大学生の生きがい感とスケール作成, 健康心理学研究, 11, 73-82
7. 福長晋也・田頭穂積：大学生における理想自己と現実自己の差異の検討－生きがい感との関連から－, 心理教育相談センター年報, 12, 75-81
8. 稲村博：思春期の危険信号 現代のエスプリ別冊 至文堂 1988
9. 近藤勉：生きがい感を測る ナカニシヤ出版 2007
10. 西平直喜：青年分析 大日本図書 1964